

2022年度 健育会グループ 医師研修会が開催されました。

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2022年11月12日（土）、「2022年度 健育会グループ 医師研修会」が開催されました。会場はホテルオークラ プレステージタワー1階にある「平安の間」。各病院からの出席者が一堂に集まったの研修会は3年ぶりとあって、和やかに談笑する姿や東北大学大学院教授・海老原覚先生の特別講演に熱心に耳を傾ける姿が見られました。

会の冒頭、私が今回の研修の意義について話しました。

来年70周年を迎えるにあたり、私は「医師の役割とは何か？」をもう一度考え直しています。

患者は病気を治すためだけに病院を訪れるのではなく、その人の人生を豊かにするために来院するのだと思います。

医師の役割は病気を治すだけではありません。医師の指示のもとに医療スタッフが治療を行い患者の病気は治癒します。しかし、病気が治癒しても必ずしも患者の人生が豊かになるとは限りません。

30年前、私は健育会グループのMVV（ミッション・ビジョン・バリュー）を策定し「光り輝く民間病院グループ」というミッションを掲げました。企業はpurpose＝（目的）が必要です。明確なpurposeがないと衰退していきます。30年前につくった健育会のpurposeは国に依存せず、民間の力だけで経営していくことです。

堅実な経営のもとにスタッフ全員が愛情をもって親身な対応を目指すこと、それがこれから健育会の目指す「光り輝く民間病院」です。改めて愛情をもって親身な対応とは、医師の皆さんにも考えてほしいと思います。

医師の使命は全身全霊で患者の治療をすることに間違いはないが、患者は病気を治すだけでなく、人生を豊かにするために病院に来ていることを常に意識して接することが大切です。

医師は患者の病気を治すだけでいいのか、患者が何を求めているのか判断しないとダメです。その根底が愛情をもって親身な対応だと考えます。

医師に求める愛情とは目の前の患者さんに愛情を注ぐことではなく、人間愛を持って患者の尊厳を平等に扱うことです。

私の好きな映画に『レナードの朝』があります。30年間昏睡状態にある患者が人としての尊厳を取り戻せるよう奮闘する医師の物語で、実話に基づいています。医師の想いは患者に伝わります。

患者には個性や様々なバックグラウンドがありますが、その人の人生が豊になるにはどのような判断が必要か医師は自分の役割を考え直してほしいと思います。

そして患者さんの思いに応じてこそ本当に親身な対応ができる医師であります。

それはどういうことなのかをこの研修をスタートラインとして考えていただきたいと思います。



今回特別講演の座長は、長年に渡り北海道大学病院リハビリテーション科教授をお務めになり、4月より健育会グループの喬成会副理事長に就任いただいた生駒一憲先生が務めました。



東北大学大学院医学研究科 内部障害学分野 教授 海老原覚先生による特別講演の演題は、「リハビリテーション医療における医師の役割」。今後国内のリハビリテーション界を牽引される気鋭の先生による講演は、大変示唆に富む内容でした。



まず、海老原先生は近年の身体障害者手帳の発行件数のデータから、内部障害者が今後急速に増加することを予測され、「これからは重複障害の時代であり、リハビリニーズもより複雑化・複合化する」という前提を提示されました。そのうえで、脳卒中リハビリを例に、「女性」「高血圧」「認知機能の低下」「インスリン投与」「タンパク尿」「喫煙」などの疾患の発症要因が、機能回復の阻害要因にもなることを明示され、リハビリ科が「機能障害の回復訓練⇒能力障害への代償機能の提供⇒社会的不利益を生まないための福祉資源の活用」に対応すべきだとされました。その際、重要となるのが多職種連携であり、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士はもちろん、看護師・薬剤師・歯科チーム・管理栄養士・認知症ケアチーム、さらにはベッドやマットなど周辺環境を整える福祉用具スタッフまで含めたチーム全体を医師が束ねていくことの重要性を指摘。その事例として、前職の東邦大学医療センター時代につくられた嚙下対策チームや石巻健育会病院での活動などをご紹介いただきました。



臨床研究では「嚥下反射が起きやすい水の温度」を評価され、「冷たい水、または温かい水が嚥下反射を起こしやすい」という結論に。ご高齢者の食事作りたてで熱さ冷たさを感じられるものが、「飲み込みやすく、美味しく、衛生的」とであるとされました。

さらにご高齢者の食事には香辛料の活用が効果的であると、その研究の成果と臨床での具体的な活用方法をご説明いただきました。まず、海老原先生のチームは以前よりカプサイシンが嚥下反射を活性化させることを確認されており、毎食前にカプサイシントーチを患者さんに舐めてもらうことで食事が進むという報告がありました。メントールも嚥下反射を高めるため、メントール入りゼリーの商品化も実現。黒胡椒の臭いにも同じ効果があることを老人保健施設での臨床実験で確認し、黒胡椒のアロマチップも商品化されました。残念ながら、その後カプサイシントーチとメントール入りゼリーはメーカーで生産中止となりましたが、黒胡椒アロマチップは今も販売されているそうです。



他に口腔ケアと嚥下反射の関係や、嚥下機能を高める取り組みを後方施設や在宅へ伝達することの重要性、外来での呼吸リハビリにおける患者教育、合併症対策、認知症リハビリテーションにおける対象者の人間理解と尊厳回復の重要性などにお話が及び、最後にリハビリテーションにおける医師の役割について総括されるという非常に幅広く濃密な講演でした。



その後の質疑応答では、多くの先生から次々に具体的な質問が寄せられ、海老原先生から臨床研究を踏まえたアドバイスをいただきました。



熱川温泉病院 原田俊一先生



石巻健育会病院 渋谷拓見先生



西伊豆健育会病院 秦康博先生



西伊豆健育会病院 伊藤静先生



竹川病院 大森康匡先生



花川病院 副理事長 生駒一憲先生



花川病院 院長 菅沼宏之先生



ねりま健育会病院 島田健先生



ねりま健育会病院 東山大士先生



ねりま健育会病院 金川泰大先生



湘南慶育病院 副院長 前田耕太郎先生



湘南慶育病院 齊藤和裕先生



湘南慶育病院 和田則仁先生



石川島記念病院 葛原信三先生



本部 健育会副理事長 宮崎雅則先生

コロナ禍という厳しい社会状況を乗り越えて、健育会グループは来年70周年の節目を迎えます。健育会グループでは、これからも「光り輝く民間病院グループ」というミッションの達成に向けて、クライアントに人間愛を持って親身に接する医療を目指していきます。